

1. 第 190 回村上優子氏が採り上げた新版西田幾多郎全集第 16 巻 584 頁の「自己から物へ 物から自己へ 自己が物となる、物が自己となるとは、自己が真の自己になる事。キルケゴールの云う絶望に於いて神の信仰によって」を考察。「から…へ」「となる」に転換が認められること。その転換が「キルケゴールの云う絶望に於いて神の信仰によって」なされていることが指摘された。禅宗の「放下」、道元の「現成公案」への言及、芭蕉の句「よく見ればなずな花咲く垣根かな」の解釈、さらには禅宗の基礎となる経典である「金剛般若経」における「即非の論理」への言及によって、禅宗との関係が指摘されたが、こうした転換がキルケゴールの「絶望において」と「神の信仰によって」なされている点に、諸宗教を見渡しながらかの体験を論理化せんとする西田の特徴が見られるとされた。

次いで哲学的問い、「絶対的他者」とは何かについて考察した。自と他は対で意味を持つ。絶対的他者というのは矛盾した語である。これをどう考えるか。人間は不完全で神は完全、ということから考察を開始した。この考え方ではなお完全と不完全が対になっていて相対性を免れない。しかし人間は不完全でありながらも、完全であろうとする。人間が「自己」という言葉を手にした以上、そこから出発してどこまでも頑張ることしかできない。しかし自らの力ではどうにもならないことに頷く時、自らの不完全を悟る。そうになると人間は不完全なままに絶対的他者である完全なる神に摂帰する。また絶対的他者も自らの相対的な在り方から絶対的な在り方を取り戻す、このように考えるならば理解できるかもしれないという示唆が与えられた。

## 2. テキスト

「八 意志自覚の形式として種々の因果律、精神的因果と物理的因果」（71 頁後ろから 6 行目から八の終りまで）

## 3. テキスト要約

物理的世界（自然）と精神現象界（人間）が一つの型によって考えられることによって、機械的因果（無生物）、合目的因果（生物）、精神的因果（人間）が、意志が意志を見る（自覚の）形式として解することができる、というのがこの章の結論である。精神的因果がプラトンの理念的因果と重ねられているが、理念とはイデアのことであり、理念の自己発展とはプラトンが後期対話篇で行ったイデア間の関係づけのことを指すであろう。因みにイデアとは「○○そのもの」ということであり、この○○には言葉が入ることから、理念的因果とは言葉（ロゴス）と言葉（ロゴス）の関係でもあろう。この展開を本格的に行ったのがヘーゲルである。人間が言語的存在であることを考えるならば精神的因果を理念的因果に重ねることは頷けることであろう。

## 4. 哲学的問い

ニーチェは神は死んだとして、形而上学的実体を立てることを厳しく批判した。西田が思惟が窮する所に絶対的他者を立てるのはどういうことになるのか。